

序 文

昭和六二年は、成城学園創立七十周年にあたる。それを記念して、記念式典、記念音楽祭など、いくつかの行事が行われた。この記念特集号も、それに因んで発刊の運びとなったものである。

成城学園が、いまではすっかり都心になった牛込の一角に誕生したのは大正六年四月のことであった。記録によると「崩れ落ちそうなぼろぼろの古校舎」からスタートしたといわれる。大正一二年に、校歌にもうたわれている武蔵野平野の一角に引き越してきたのである。大正一二年といえば、関東大震災の年である。この震災を契機に、神社仏閣などが多く、当時としては閑散とした郊外に引越し、東京の郊外化が一挙に進んだ。昭和二年には、小田急電鉄が開通して、至近距離に鉄道駅が設置された。このことが契機となって、やがて郊外住宅地としての成城の地が誕生することとなったのである。爾来六〇有余年、成城学園は幾多の試練をくぐり抜け、今日に至っている。

成城学園の創立者は、澤柳政太郎である。澤柳政太郎は、慶応元年四月二三日生まれであり、明治二十一年に大学を卒業すると同時に文教行政にたずさわった。明治三九年に、文部次官に就任したが、その間に、中学校長、高等学校校長などを歴任し、単に行政官というだけでなく、立派な教育者としての地位を確立していったのである。とはいえ、当時のわが国の教育は、澤柳政太郎にとっては、満足すべき状況にあるとはいえなかった。明治

序 文

四二年に刊行された、澤柳の「實際的教育学」の「序」の冒頭で、「予は今日まで世に現われたる教育学に対し頗る不満足を表するもの、此等は何れも教育学なるものの当然研究すべき問題を研究せず、否接触することすらせず、嘗に實際と没交渉であるばかりでなく、何れも学者の一家言たるに過ぎざるものと考えるものである。而して、教育学はいつまでも従来のような状態に沈淪してあつてはならないと信ずる。……更に換言すれば、従来教育学を根本より改造せんとするものである。」と述べている。このわずかな引用の中に、澤柳の教育学に対する意気と息吹を読みとることは決して難しいことではなからう。

このような澤柳の教育学に対する気概がやがて大正六年の成城学園の創立へとかりたてたのであろう。大正年間といえば、大正デモクラシーを想起する。その真只中であつて、成城学園の教育は自由主義の洗礼をより強く受け、彫琢を重ねていったのである。全人格的な、自由な教育は成城学園の芯のようなものであるといつても過言ではなからう。

この精神こそ、将来とも、成城学園の教育理念として燃え続けるであらうし、燃え続けるべきものである。教育の多様化の中で、ともすれば澤柳の残した理念が忘れられがちである。七十周年を機に、われわれの心奥にあらためて宿しておきたいもの、それが澤柳政太郎の教育理念である。

昭和六二年二月

経済学部長 岡 田 清